

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 3 号 (5 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イネ	ヒメトビウンカ 縞葉枯病 イネミズゾウムシ	やや少 並 <u>多</u> (並)
果樹	ナシ黒斑病 ナシ黒星病 カキ炭そ病	やや少 (やや少) <u>やや多</u> (やや少) <u>やや多</u>
チャ	チャノコカクモンハマキ クワシロカイガラムシ	やや少 (やや少) <u>やや多</u> (やや多)
野菜	アブラムシ類とモザイク病 キャベツ菌核病 コナガ (キャベツ、ハクサイ) ネギさび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	並 (並) 並 (並) 並 (やや多) <u>多</u> (多) やや少 (やや少) 並 (少)

※平年とは過去10年の平均である。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ 目次 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

予報の概要 1
予報本文 2
今後注意すべきその他の病虫害等 6
参考 I 近畿地方の気象の 1 か月予報 9
II 用語の定義 9
III 予報本文の見方 10

予報本文

イネ

1 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや少ない
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、ヒメトビウンカの発生量は平年比やや少ない(－)。
- (2) 昨年は、縞葉枯病の発生は認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生は減少している。

2 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年比多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯での誘殺数は平年比多い(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法で防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 越冬病枝率は、平年比少ない(－)。
- (2) 向こう1か月の気温は低く、降水量は平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 小袋掛け前に、病斑のある果実は摘果し防除を徹底し、速やかに小袋掛けを行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）前年１０月の発生量は、平年並。
- （２）向こう１か月の気温は低く（＋）、降水量は平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）果実では、幼果の時に感染する。
- （２）芽の基部に病斑が生じた短果枝は、切り取り処分する。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- （１）前年１０月は発生を認めなかった（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は低く、降水量は平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。
- （２）新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた場合は、速やかに切り取り園外の土中に埋める等処分する。
- （３）５～６月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）前年秋期の発生量は平年並。
- （２）４月中旬現在、発生を認めていない（山城で平年並、丹波で平年比やや少ない（－））。
- （３）４月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年比少なく（－）、綾部で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （２）通常、第１回目のふ化期は５月末～６月始めで、４回世代を繰り返す。
- （３）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

2 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１）前年秋期の発生量は、山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並。
- （２）４月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。ふ化直後の1齢幼虫は、まだロウ物質で覆われておらず、移動することができる。また、5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているので、この時期のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。
- (2) 発生は園により差があるので、毎年発生し前年に適期防除できなかった園では注意する。なお、標高の高いところでは、ふ化が10日程度遅れる。
- (3) 多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

野菜

1 アブラムシ類とモザイク病（ナス、トマト、トウガラシ、キュウリなど）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 4月上旬現在、トマトで発生を認めている。
- (2) 4月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) 定植時のシルバーストライプマルチは有翅虫の飛来に忌避効果がある。

2 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 前年秋期は発生を認めなかった（平年並）。
- (2) 4月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (3) 向こう1か月の気温は低く、降水量は平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存可能である。

3 コナガ（キャベツ、ハクサイなど）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は亀岡で平年並、丹後で平年比やや多い（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

(2) 年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

4 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。
- (2) 前年秋期の発生量は平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は低く（+）、降水量は平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 春に比較的低温で、降雨が多いと多発する傾向がある。

5 ネギハモグリバエ（ネギ）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬し、成虫は4月中旬頃から発生する。年間5～6世代繰り返す。
- (2) 比較的砂地の土壌で発生が多く、5～6月に少雨の年に多発する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

6 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年並（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

4 種子消毒について

- (1) 温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

1 赤かび病

近年、大麦などの麦類の赤かび病による被害粒混入基準が厳しくなり、実需者から品質の高い麦生産が求められている。そこで、高品質の麦を安定確保するため、下記のとおり赤かび病防除の徹底が重要である。なお、薬剤を散布する場合は、近隣への声かけと飛散（ドリフト）防止には十分に気をつける。

- (1) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。
- (2) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよ1週間後である。
- (3) 防除の適期は、「1回目：大麦は穂揃期、小麦は出穂後7～10日の開花期」、

- 「2回目：1回目防除の7日後」が目安となる。
(4) 六条大麦は特に発生しやすいので、適期に遅れずに薬剤散布する。

果樹

1 カキ フジコナカイガラムシ

- (1) 通風のよくない園で発生が多くなる傾向がある。
(2) 前年カメムシ類等の防除に、合成ピレスロイド系薬剤を多く使用した園で発生しやすい。

2 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
(2) ジベレリン処理したものは、開花終了後に花がらを落とす。
(3) ハウス栽培では換気に努める等、予防を徹底する。

チャ

1 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。平成21年の調査では、府内各地で発生を確認し、多発園も認めた。

- (1) 成虫の発生
年に3～4回発生する。
(2) 登録のある薬剤
- ・ハチハチ乳剤
 - ・ハチハチフロアブル
 - ・アプロード水和剤
 - ・アプロードエースフロアブル
 - ・ダニゲッターフロアブル
 - ・ランネート45DF

※ チャに寄生する「ミカントゲコナジラミ」は、「ミカントゲコナジラミ（チャ系統）」と表記されることがあります。

2 カンザワハダニ

一番茶芽が霜害を受けると、残った健全芽が集中的に加害を受け、著しい被害となるので、防除を徹底する。

野菜

1 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus) の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成21年9月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りと

タバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【施設栽培】

- (1) 黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。
- (2) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

2 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプ J p L）、バイオタイプ B（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプ Q が確認されている。バイオタイプ Q は平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになった。

府内の分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。

平成17年には山城地域でバイオタイプ Q が府内で初めて確認され、平成20年10月には、府内全域で発生を認めた。

バイオタイプ Q は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (4月17日から5月16日までの天候見通し)

平成22年4月16日
大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

1週目は天気がぐずつくでしょう。その後はおおむね数日の周期で天気が変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の気温は、低い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は

平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、2週目が低い確率70%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	50	30	20
降 水 量	20	40	40
日 照 時 間	40	40	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は低く、降水量は平年並または多く、日照時間は平年並または少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり的一面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」には発生量等を予想している病害虫を、「今後注意すべきその他の病害虫等」には発生量等の予想はしていませんが、注意すべき病害虫について記載しています。

(見方の例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「Ⅱ 用語の定義」の「4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波でやや多い（+）。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の（-）、（+）は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合は発生量が少なくなる要因、（+）は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧

・ 京 都 乙 訓	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サービス

・ ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －